

図1 大下藤次郎《穂高山の麓》1907年 水彩・紙 47.5×67.5cm
東京国立近代美術館蔵

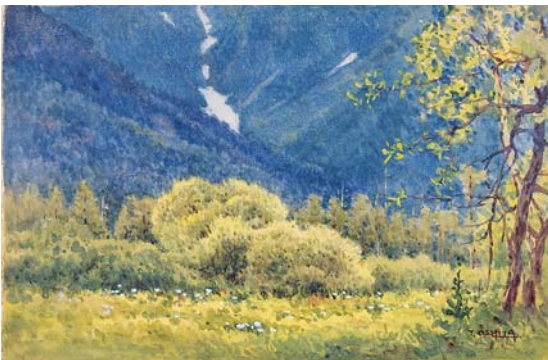


図2 大下藤次郎《残雪》1907年頃 水彩・紙 22.3×33.2cm
島根県立石見美術館蔵

大下藤次郎の《穂高山の麓》〔図1〕は、上高地の原生風景を描いた水彩画である。土居次義によれば、この作品は《残雪》

〔図2〕をもとに描かれた〔註1〕。確かに両者は中景に描かれた低木、その後ろに広がる林間、枯木、後景の山容の形態において極めて類似している。大下は現場で描いた絵を「写生」、それをもとに後日描き直したものを「複写」と呼んだという〔註2〕。比較的粗いタッチによる《残雪》を「写生」、大きな画面に緻密に描かれた《穂高山の麓》を「複写」と捉えることができ

ようか。しかし、このふたつの絵画には水面の有無という一目瞭然の違いがある。更に、画面右端の二本の樹木の形も異なる。この違いをどう捉えればよいか。考えられる可能性はふたつ。《穂高山の麓》のもとになった「写生」は、《残雪》ではなく別にあるという可能性。あるいは大下の「複写」という行為には、編集という過程も含まれると捉える可能性である。すなわち本作は現実を忠実に模したもののか、それとも複数の写生を構成して作り上げられた風景か。以上の疑問から、本作に

描かれた景観が実在するかどうか、現在の上高地を検証してみることにした。

現在の上高地の景観との比較

上高地は長野県西部、松本市にある。中部山岳国立公園の一角で、四方を標高三〇〇〇メートル級の山に囲まれた標高約一五〇〇メートルの平野である。

今回、《穂高山の麓》を探索するにあたって、梓川の西岸にある上高地温泉ホテルを基点とした。かつて上高地温泉株式会社と称した同宿舎には、大下も同地の写生旅行で宿泊した。ここを中心に見れば、北から北東の方向に穂高連峰、明神岳、東に六百山、霞沢岳、南西に大正池、焼岳がある。目の前を流れる梓川は、山間の谷底に沿って蛇行している。宿から川上へ向かえば、河童橋、更に進めば明神池に至る。明神池から南に進めば、大下がこの地へ赴くために越えた徳本峠がある。

それでは現在の上高地を歩き、《穂高山の麓》に描かれたような風景を探索してみよう。まず、上高地温泉ホテルの手前にかかる田代橋（A地点）から穂高連峰を見た。奥穂高岳の山腹の残雪は見えるものの、大下の描くそれに比べると、右手前の

西穂高岳の山裾が奥穂高岳の山腹をより大きく遮っている。山の向きを考慮に入れば、もう少し東へ回り込んだ方が大下の作品に近いように思える。そのため、梓川の東岸に沿って河童橋方面へ向かった。程なくして梓川がクランク状に折れ曲がる地点に達する（B地点）。ここでは、奥穂高岳の山腹が先程よりも開けて見える。さらに、B地点では梓川が並行に流れているように見えるため、大下の描く風景の印象に一層近い。

C地点は、B地点から河童橋方面へ少し進んだ場所だ。ここに至ると奥穂高の山裾がかなり開けて見えるため、本作品の印象とは大きく違ってくる。

今度は反対に梓川東岸を下ってみよう。梓川の河原（D地点）からの眺望も、大下の描く穂高連峰の地形に近い。だがE地点まで来ると穂高岳の麓という感じは薄まり、扇状に展開する穂高連峰を遠巻きに望むという印象だ。

以上の実地調査から、《穂高山の麓》に描かれた穂高連峰のかたちは、彼の宿泊した温泉宿周辺からの眺めに近いと推測される。とりわけこの辺りで穂高連峰を望みながら、視界を横切る河川をも同時

に見られる場所は、B地点くらいしかない。ちなみに焼岳が大噴火し、大正池が生まれた一九一五(大正4)年以前に刊行された地図(一九二二年)と現在のそれを見比べると、この周辺地域の地形は殆ど変

わっていないため、穂高連峰の見え方は大下の時代と大差ないと考える。

紀行文に見る大下藤次郎の写生旅行

ところで上高地における大下の足跡は、



地図 国土地理院発行の2万5千分の1の「上高地」(1993年)「穂高岳」(2014年)「焼岳」(2012年)の一部を合成し、撮影地点などを加えた。

『山岳』と『みづゑ』に掲載された彼自身の紀行文から窺い、知ることができる「註3」。それによれば一九〇七(明治四十)年七月十七日、大下は画家仲間磯辺忠一とともに、電車にて松本駅に到着。馬車で鳥々へ向かい、徳本峠を徒歩で越え、その日のうちに上高地に入った。その後、二十二日まで上高地温泉株式会社に宿泊し、以下のように過ごしている。

18日 宿の前の河原で霞澤岳を写生。朝食後、明神池を散策。帰路、徳本峠付近に寄り、水溜まりに影を落とす楊を写生。更に穂高山の一角をスケッチ(写生1)。宿に戻り、近くの笹原から穂高岳の残雪(写生2)を描く。
 19日 梓川を前に霞澤岳を描く。降雨のため、宿の縁側で背後の山を写生。
 20日 宿から川下へ蒲田道に沿って進み、梅の枯木を前景に穂高岳の残雪を描く(写生3)。更に1里ほど進み焼岳の麓から楊を中景に置いて穂高岳をスケッチ(写生4)。宿に戻り、18日の続きを描く(写生2)。
 21日 川下で新たに穂高の一角、残雪の様子をそれぞれ描く(写生5、6)。宿近くで梓川を隔て、焼岳を写生。
 22日 出発。徳本峠付近から穂高岳を描く(写生7)。

もし仮に《穂高山の麓》がそのままの現実の再現だとすれば、この絵を描くための立脚点と考えられるのは、大下の宿泊地付近、具体的に言えばそこから対岸をわたり、やや川上に進んだB地点辺りだ。だが、紀行文のなかでこれに合致する記述を確認できない。高所からの眺望である写生1、7の地点は当然として、川下の蒲田道で描いたという3、4、それに準じる場所では描かれたと思われる5、6でも、本作品とはおそらく異なる角度の穂高連峰が見えるだろう。ちなみに蒲田道とは、上高地から中尾峠(焼岳)を通って蒲田温泉(現在の新穂高温泉)へと至る道であろう。

写生4では楊を中景に穂高岳を描いたというから、《残雪》「図2」がこれに該当するかもしれない。しかし宿から一里以上も離れたところで見える穂高連峰の山容は、宿近くで見えるそれとはかなり異なるはずだ。最も可能性が高いのは、宿付近で穂高岳を描いたという写生2だが、『山岳』における大下の記述によれば、これは同誌の口絵に掲載された《六月の穂高岳》「図3」、『山岳』には『穂高山の残雪』と表記である「註4」。

まとめ

今回の調査では、『穂高山の麓』に描かれた穂高連峰の地形は、大下の宿泊地付近の河原から見た景観に近いことが分かった。約一〇〇年も前に大下が描いた



図3 大下藤次郎《六月の穂高岳》1907年 水彩・紙 31.0×48.0cm
市立大町山岳博物館蔵 図版：市立大町山岳博物館提供

風景を、私たちは今も上高地で見ることが出来る。同地の変わらぬ自然と、大下の的確な描写力に驚かされる。

一方で大下の記述によれば、彼が宿泊地付近で梓川を前景に描いたのは他の山ばかりである。このことを考慮すると、本作品は自然の景観を単純に模したというより、いくつかの写生を組み合わせたものと捉えたい。実際この作品には、川辺に群生する低木の楊や枯木など、上高地の自然環境が作画的にも思えるほどよく描かれている。加えて大下の紀行文を読みこめば、この作品は上高地に対する彼の印象の総合のように思える。たとえば、取って山の頂上を描かないことで得られた山容の迫力は、高い山に囲まれているため

空が「天窓より望むが如く狭く限られ」[註5]「同地の地形に対する彼の実感に基づくものである。また「湖の如く波なく音なくして流る、」[註6]「梓川について、「水に興味深き僕も曾て見たこともなく、またこれを描き現はすことも出来ぬ」[註7]と、彼は非常に深い感銘を受けている。このように本作品には、上高地におけるふたつの特徴的な景観、すなわち平野を圧倒するよう取り囲む高山と、その谷底のある透感のある水面という、ともすれば対照的な要素が中景における低木から高木へと段々とせり上がっていく森林の展開によって、矛盾なくひとつの画面のうちに繋ぎとめられている。それを通じて、上高地の変化に富んだ自然の姿がいきいきと表されているのだ。大下自身「作家の頭で、取捨し改造して、即ち自然の最も善いところを適宜に集めてこそ、よい絵が出来る」[註8]と述べているように、彼の言う「複写」には、「編集」という概念が含まれていると考えてしかるべきではないか。それどころか「写生」そのものが、当時、現実の再現ということだけでは汲みつくせない意味を含んでいたのかもしれない。たとえば大下の盟友とも言うべき登山家で文筆家の小島鳥水は、写生(文)について以下のように述べている。

繁を欲すれば繁、簡を欲すれば簡、九

を略して一を存するも可、特點を擧げて通有點を没却するも亦可、(中略)動くものはその形骸にして、活くるものはその靈なり、寫生の至妙なるものは、その皮を剥き、その核を削つて、恍焉として人を移すの力あり[註9]

大下もまた「自然の現象の外面的描写」だけではなく、「深い感情」を表すことも重視していたように、外観を忠実に模することだけでは「絵」として不十分という認識を持っていた[註10]。このように《穂高山の麓》は、現実の風景をもとにしながらも、大下の上高地に対する印象の総合として組み立てられた可能性がある。現実を忠実に模した自然主義的作品と評されることの多い大下の水彩画だが、そこに底流する編集意識について、機会があれば更なる検討を加えてみたい。(美術課研究員)

註

- 1 土居次義『水彩画家 大下藤次郎』美術出版社、一九八一年、一七五頁。
- 2 鳥根県立石見美術館編『大下藤次郎の水彩画 鳥根県立石見美術館所蔵 大下藤次郎作品集』美術出版社、二〇〇八年、一二四頁。
- 3 大下藤次郎『雑録 口繪穂高山残雪寫生の旅行談及所感』『山岳』第二年第三号、一九〇七年十一月、一三九—一四二頁。汀鷗(大下藤次郎)『穂高山の麓』『みづる』第五二号、一九〇九年十

月、一〇—一八頁。

4 大下「雑録」前掲、一四二頁。

5 大下「穂高山の麓」前掲、一六頁。

6 同右、一七頁。

7 大下「雑録」前掲、一四二頁。

8 大下藤次郎『最新水彩画法』一九〇九年。引用は以下の再録先から。大下藤次郎『大下藤次郎美術論集』美術出版社、一九八八年、一七頁。

9 小島鳥水「紀行文に就きて」一九〇三年。引用は以下の再録先から。『小島鳥水全集』第四卷、大修館書店、一九八〇年、四八〇頁。

10 大下藤次郎「写生画の研究」一九二二年。引用は以下の再録先から。大下藤次郎『大下藤次郎美術論集』美術出版社、一九八八年、一九九頁。

次号予告 2014年12月-2015年1月号 12月1日刊行予定

現代の眼 609

高松次郎 ミステリーズ
奈良原一高 王国
近代工芸案内——名品選による日本の美
Review
菱田春草展

2014年10月1日発行(隔月1日発行) 現代の眼 608号
編集：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館/美術出版社
制作：美術出版社
発行：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館
〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1 電話 03(3214)2561
表紙：菱田春草《蘇李訣別》1901年 絹本彩色・額 149.0×97.5 cm
東京国立近代美術館賛助会員(MOMAT メンバース)
SEIKO セイコーホールディングス株式会社 | 鹿島建物 | 三菱商事